

---

# 明治期日本の美学と芸術研究

---

平成10年度～平成13年度科学研究費補助金  
(基盤研究(C)(2))

## 研究成果報告書

(課題番号: 10610051)

平成14年3月

関西学院大学教授

加藤哲弘

はしがき

---

☆研究課題名：明治期日本の美学と芸術研究

☆研究組織

研究代表者：加藤哲弘（関西学院大学文学部教授）

☆交付決定額（配分額）

（金額単位：千円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 10 年度	1000	0	1000
平成 11 年度	600	0	600
平成 12 年度	500	0	500
平成 13 年度	500	0	500
総 計	2600	0	2600

☆研究発表

(1) 学会誌等（発表者名 / テーマ名 / 学会誌名 / 巻号 / 年月日）

- ・ Tetsuhiro KATO / E.F.Fenollosa and the Importation of Aesthetics into Japan / 美学論究 / 14 / 1999-3-20.
- ・ 加藤哲弘 / 制度としての美術史学とその研究対象 / 美学論究 / 15 / 2000-3-20.
- ・ 加藤哲弘 / 大塚保治と近代日本における芸術研究 / 人文論究 / 51-1 / 2001-5-20.

(2) 口頭発表（発表者名 / テーマ名 / 学会等名 / 年月日）

- Tetsuhiro KATO / E.F.Fenollosa and the Transplantation of Aesthetics into Japan / The 14th International Congress of Aesthetics / 1998-9-2.

(3) 出版物（著者名 / 書名 / 出版者名 / 年月日）

- ・ 加藤哲弘 / 『今、日本の美術史学を考える』所収「近代日本における美学と美術史学」平凡社 / 1999-5-19.
- ・ 加藤哲弘 / 『関西学院 111 周年文学部記念論文集』所収「近代日本における美学の社会的機能：西周の場合」関西学院大学文学部 / 2000-12-25.
- ・ 加藤哲弘  
『講座日本思想第 4 巻「芸術」』所収「矢代幸雄と近代日本の文化政策」晃洋書房 / 2002-3-20.

## はじめに

---

この研究の目的は、明治期日本において美学と芸術研究が置かれていた状況をふりかえることで、現在あるいは今後の美学のあるべき姿を探ろうとする点にある。

具体的には、日本で美学研究が本格化するまで、つまり、1870年頃からの西周らによる美学の導入の始まりから、1900年の大塚保治が東京帝国大学美学講座の初代教授に就任するまでに時期を限定して調査と調査結果の分析を行い、そうすることで、現在にまで規制力を保持している我が国の美学の制度的枠組みの成立背景に迫ることを本研究はめざした。

この時期の美学については、すでに定評のある研究がいくつかなされている。たとえば、山本正男（明治時代の美学思想、国華 1952）、土方定一（明治藝術・文學論集 [明治文學全集] 1975）、金田民夫（日本近代美学序説 1990）たちの残した業績なしには、本研究の遂行はありえなかっただろう。また、国外でも、欧米、とくに近年の米国での文化研究のなかには、日本近代における美学や芸術研究に注目するものがいくつか見られる。

しかし、これらの先行研究を念頭に置きつつも、この研究の出発の時点でわたしは、それらとは異なった方法論的観点として、当時の芸術観を相対化する社会史的観点からの研究を進めようと考えた。この研究で、わたしがもっとも重視したのは、当時の「美学」を最初から自明視しないという姿勢である。この時期に「美学」と呼ばれていたものは、広く世界各地の知識人たちに共有されていたある種の新古典主義的な芸術観の色彩を強く帯びていた。この「美学」は、「近代」的なものの見方を、距離を置いてとらえることができるようになった1980年代以降になってはじめて対象化されるようになったといえよう。

以下に収録できた6本の論文は、テキストの分析や社会情勢の考察、ドイツに代表されるヨーロッパ諸国との比較などとともに、近年盛んになった社会史的ないしは知識社会学的方法を援用しながら、このような当時の「美学」をできるだけ相対化し、そのような主張を生み出す社会的コンテクストのなかでとらえることをめざした成果である。

最初の論文「近代日本における美学と芸術研究」は、近代日本において学問的な芸術研究が専門学科として成立していく過程を追跡したものである。ここでは、狭い意味での美学、つまり哲学的美学と、広い意味での美学、つまり一般教養としての美的趣味が果たした役割がドイツの事例と比較しながら分析され、とくに後者の19世紀的な芸術観との関係を批判的に意識化することの必要性が強調される。

第2論文「近代日本における美学の社会的機能：西周の場合」は、いわば美学以前の美学を扱う。大学の専門学科として成立する以前の「美学」は、西のケースでよく見てとれるように、その文化政策上の使命を比較的明確に表面化させていた。ここでは、西が美学に言及している3つのテキスト（百一新論、百学連環、美妙学説）の分析を通じて、彼が美学に与えようとしていた社会的役割を明らかにする。

第3論文「E・F・フェノロサと日本への美学の移植」では、フェノロサが1882年5月に、龍池会の依頼で上野公園内教育博物館観書室で行った講演「美術真説」の概要を紹介する。この講演での主張は、19世紀の欧米の知識人たちに共有されていた「プレ美学」とでも言うべき美的価値観に強く彩られていたものであった。この論文では、そのことを指摘することで、非西欧の国民国家に西欧の「美学」が導入されるときの過程の一例を具

体的に明らかにする。

1900年に「世界で最初の」美学講座の主任教授に就任した大塚保治は、同年の講演「美学の性質及其研究法」で、観念論的な伝統に依拠する従来の美学研究を鋭く批判し、科学的で実証的な芸術研究の必要性を強調した。第4論文「大塚保治と近代日本における芸術研究」では、大塚の主張が持つ歴史的意義を、「ヨーロッパとの時差の埋め合わせ」「制度に固有の論理の表面化」「美学の教養化」という3つの視点から明らかにした。

第5論文「矢代幸雄と近代日本の文化政策」は、本研究の枠組みを多少越えてはいるが、日本を代表する美術史家矢代の著作へ考察が明治期日本の芸術研究にとってもつ重要性を考えてここに収録する。この論文によれば、矢代の主張のなかには、その純粹造形論的な見かけにもかかわらず、芸術の社会的機能に対する配慮が見られる。また、対外安全保障やナショナルプライドの確保のために芸術がはたす役割についても興味深い指摘がある。

そして、最後の論文「制度としての美術史学とその研究対象」は、先進国であったドイツにおける美術史学の制度化の進行を振り返るとともに、明治期に日本に制度としての美術史学が導入されたときの対象選択の状況、さらには1970年代以降の「新しい美術史学」の登場による研究対象の幅の広がりなどについて検討する。この論文も明治期の日本を主題として論じるものではないが、制度研究の一環として、さらには、当時の美学や芸術研究と現代の状況との関係を考えるためにここに収録した。

以上の研究成果に不備や欠陥が少なくないということは、研究代表者自身がよく知っている。当初、この研究は、ジャンルや地域の点でもう少し幅広い視野のなかで進められるはずだった。いわゆる造形芸術だけではなく、明治期日本における文学（夏目漱石と森鷗外）や音楽（伊沢修二、ケーベル）の状況に目を配ること、あるいは、「美学」の導入元としてのドイツを比較対象に選ぶだけではなく、この時期の美学や芸術研究の状況を、近代的な統一国民国家形成との関係で文化ナショナリズムの興隆が見られたその他のヨーロッパ諸国、トルコ、フィンランド、オーストラリア、さらには、1945年ないしは1960年以降に独立をはたした、いわゆる第三世界諸国の状況を参照することなども、当初の構想のなかには含まれていた。しかし、これらは時間の問題や、ここ数年の研究の進展などとの関係で、わたし自身に取り組むことはある程度断念せざるをえなかった。

また、記述が、いわゆるアカデミックな美学の流れに焦点をあてたものになってしまったことも、研究の視野を狭めているかもしれない。在野の美学者の発掘とまでは言わないとしても、せめて菊池大麓や末松謙澄、あるいは島村抱月や高山樗牛といった学者や論客たち、あるいは、中井宗太郎、中川重麗といった京都を中心とした言説の興味深い展開についても十分な時間を割きたかった。このほか、中江兆民、森林太郎、岡倉天心、ケーベルなどについては、ある程度の資料調査はし終えたものの、モノグラフィーにまとめあげるまでには至らなかった。現代における美学や芸術研究との連関を強調することなどとともに、これらは今後のわたしの課題となるだろう。

いずれにせよ、一読いただければおわかりのように、これらは、発展途上の研究である。また、時間が充分に取れなかったために編集が杜撰で誤字などが残っているかもしれない。それらも含めて、忌憚のないご批判と問題点のご指摘をいただければ幸いである。

(ご意見、ご批判等は、[katotk@kwansei.ac.jp](mailto:katotk@kwansei.ac.jp) へ。また、この研究成果報告書の一部は、<http://web.kyoto-inet.or.jp/people/katotk/kaken2001.html> にも掲載されている。)

## 目 次

---

はしがき ... ii

はじめに ... iii

目次 ... v

1. 近代日本における美学と芸術研究 ... 1
2. 近代日本における美学の社会的機能：西周の場合 ... 9
3. E・F・フェノロサと日本への美学の移植 ... 19
4. 大塚保治と近代日本における芸術研究 ... 29
5. 矢代幸雄と近代日本の文化政策 ... 37
6. 制度としての美術史学とその研究対象 ... 47

---

Introduction: Abstracts of Research Project ...	59
I. The Study of Aesthetics and Art Studies in Modern Japan ...	61
(1.の英文梗概)	
II. Social Function of Aesthetics in Modern Japan: The Case of NISHI Amane ...	63
(2.の英文要旨)	
III. E.F.Fenollosa and the Importation of Aesthetics into Japan ...	64
(3.の英文原文)	
IV. OTSUKA Yasuji and the Foundation of Art Studies in Modern Japan ...	70
(4.の英文要旨)	
V. YASHIRO Yukio and the Cultural Policy of Modern Japan ...	71
(5.の英文要旨)	
VI. Art History as Institution, and Its Objects of Research ...	72
(6.の英文要旨)	
「明治期日本の美学と芸術研究」関係年表 ...	73
文献リスト ...	76
Contents ...	80